

10

明治17年、東京に生まれた渡辺節は、二高を卒業後、東京帝国大学工科大学建築学科に進んだ。

卒業後は韓国政府度支部、鉄道院を経て、大正5年、大阪と東京に渡辺建築事務所を開設した。

この時期、特に大阪は好景気に沸いており、紡績・銀行関係の仕事に恵まれ順風満帆の活躍を見せた。そして海外にも目を向け、多くの様式、新素材、新工法を体験し、積極的に後の作品に活かしていった。

昭和に入ると、多様な様式を自在に駆使した展開を見せる。

また、実利的なプランニング、先進的な設備、施工面のコストダウン、新工法による工期短縮など、実質面での合理性が関西実業家の信頼をさらに強固にした。

加えて、村野藤吾、須藤貞雄ら優れたスタッフが脇を固め、八面六臂の活躍だった。

一方、作品に対するこだわりも捨ててはいない。

渡辺節の代表作・綿業会館の有名なタイルタペストリーのエピソードは興味深い。

特別に焼かれた窯変タイルを「1枚1枚全体のコンビネーションを考え助手を使わずに私1人でこつこつと仕上げた」という記録が残っており、渡辺節が「喜びを味わいつつ仕上げた」と語り継がれている。

そして「建築は施主の意のままに作るものでもなければ、建築家の意のままに作るものでもない。

両者相知り相通じ合ってこそ、建築家につくる喜びがある」と真情を吐露している。

戦後は大阪府建築士会の初代会長を始め、関西建築界の団結・発展に体力の限界をも顧みず尽力した。

「組織の力がなければ何もできない」として、建築界を牽引したという。

「組織の力がなければ何もできない」として、建築界を牽引したという。

今号では渡辺節にスポットを当て、作品を読み解きながら彼の人間像を浮き彫りにした。

渡辺節

S e t s u W a t a n a b e



出典：渡辺節作品集

Designed and Drawn
by
S. Watanabe
25th June, 1908.

卒業設計「Design for New Houses of Parliament」塔屋詳細図〔部分、1908〕
〔所蔵：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻〕

王道を歩んだ様式主義建築家 | 坂本勝比古 | Katsuhiko Sakamoto

1—その生い立ちと背景

渡辺節は明治17年〔1884〕11月3日、東京麹町平河町で生まれ、この日は明治天皇の誕生日であったので、節と名付けられた。父は後に陸軍少将となる渡辺祺十郎で、福島県相馬の出身。12才の頃、単身東京に出て、苦勞して兵学寮に入り、独力で少将にまで昇り詰めたといわれるから、立志伝中のひとりであったといえよう。

節は父親の勤務の都合上、青森県弘前で小中学校を終え、明治37年〔1904〕仙台の第二高等学校に学び、続いて東京帝国大学工科大学建築学科に進んで、同41年〔1908〕に卒業している。卒業制作は「国会議事堂」であり、その達者な筆致は、将来の片鱗をうかがわせるのに十分であった。就職先はなぜか日韓併合間近な韓国政府度支部建築所技師であった。

度支部とは日本の大蔵省のようなところで、釜山、仁川などの税関庁舎を手掛けている。彼が韓国政府機関に赴任した事情については明らかでないが、当時、日本の官庁営繕の頂点にあった妻木頼黄の世話でなかったかの説がある。妻木は辰野金吾や片山東熊と並んで明治の建築界三巨頭のひとりであった。このことを裏付ける理由として、妻木は渡辺が東大を卒業した明治41年に韓国度支部の工事顧問を委嘱されており、同年10月、韓国に渡って各地を視察することがあった。また妻木が渡辺を評価した理由として、当時、日本では国会議事堂の建設という大きなテーマが建築界に託されており、これを辰野金吾は懸賞競技で公募すべしとし、民間の力または建築学会を後ろ盾とする意見を述べているのに対して、妻木は官僚の立場から、議院建築は大蔵省を中心とした官僚組織や官僚建築家たちの手で実現させることは可能であるとして譲らなかった。

妻木は明治41年に京都高等工芸学校教授だった武田五一を大蔵省技師として兼務させ、大蔵官僚であった矢橋賢吉らと同じ時期に欧米に派遣して各国の国会議事堂を見聞させることがあったことから、渡辺の卒業設計は妻木の目に当然留まっていたことであろう。妻木は部下の面倒見の良いことで定評があったといわれ、渡辺が大正3年〔1914〕12月に結婚した時の媒酌人は妻木頼黄であった。

2—渡辺節と京都駅舎

渡辺節は明治45年〔1912〕、韓国を去って鉄道院西部鉄道管理局に移った。そこで彼が手掛ける機会を得たのが京都駅舎の新築であった。明治天皇が崩御し、大正天皇が京都で御大典を迎えるにあたって、駅舎の新築が急浮上したからである。当時、鉄道院に適当な人材がなく、新任若手の渡辺にお鉢が回ることとなった。当時、中央では東京駅舎が辰野金吾の設計で進められ、320mに及ぶ駅舎の中央に天皇を送迎する皇室専用の出入りが設けられ、大正3年12月に完成したばかりであった。ここで渡辺が定めた提案は、その中心を烏丸通りに設け一般乗降客の出入り口とし、皇室貴賓用の建物は西翼部に設け、その間に高塔をあげるという斬新なものであった。この提案に対し鉄道院の中央では猛烈な反対があり、駅舎の中央に皇室用の出入り口を設ける案が主張されたといわれる。これに対して渡辺は西部鉄道の幹部を説得し、西部の長谷川局長と共に中央の副総裁、局長連中の前で検討会議が開かれ、いまだ雇いの身分であった渡辺は自説を主張し、その後ついに実現に漕ぎ着けるに至ったといわれる。この駅舎は写真でようやく見えるように、全体として非対称形の構成で、木造ながら抑揚があり、いかにも若き時代の渡辺の伸びやかな作風が印象付けられる建物であった。しかし、このような努力に対する鉄道院での褒賞は乏しく、渡辺をして独立への道を歩ませることとなる。



釜山税関庁舎



京都駅舎 | 青年建築家としての渡辺節の若々しい発想が偲ばれる作品〔出典：『近畿建築士のひろば』1966.5〕



神戸海洋気象台★



大阪ビルディング本店★ | 貸事務所としての性格を持っていたこのビルは、豊かな装飾性を持つと同時に、シンプルなオフィスビルとしての表現も忘れなかった



大阪ビルディング東京支店第一号館★

日本興業銀行本店 | 上—外観★/下—営業室★
ルネッサンス様式の特徴である左右対称、ルスタカ(切石積み)風の表現で、整然とした様式建築の安定した魅力を引き出すことに成功している。室内空間の壮麗な意匠は、古典的様式のみならず、現代的な意匠も示しているといえる

3—華麗なる様式建築の展開

大正5年[1916]、渡辺節は独立した建築事務所の創設を決意し、大阪、東京にて活動を開始した。当時の社会や経済状況として、第一次世界大戦の勃発によって一時不況に見舞われるが、まもなく復活し、戦争の景気に支えられて大きく成長する機運に恵まれた。大阪の経済や財界人の活動について詳しい宮本又次は、大阪の経済界について、「大正期はいわば大阪の経済的黄金時代であった。従ってこの期間には多くの企業家、実業家が輩出し、その財界活動は目ざましいものがあつた」と述べている。いわば渡辺建築事務所の船出は日本の資本主義上昇気運に乗って、恵まれた時代にあつたといえる。その効果はこの時期、次々と実施に移された多くの作品によって知ることができよう。彼の作品歴を順に追って見ていくと、目立ったものとして、神戸海洋気象台[1920]を皮切りとして、次に旧大阪商船神戸支店[1922]がある。彼はこの建物を設計するに際し、欧米の建築視察に出かけている。その時期は大正9年[1920]4月であり、彼は外遊中にいろいろな体験を神戸支店の工事に活かしていく。例えば外壁にテラコッタの使用、ブラスターの輸入と国産化などがそれぞれあり、外観は欧米のオフィスビルの伝統様式を採用し、神戸海岸通りに典型的なスタイルを表現した。この時の渡辺の取り組みは、引き続いて、大阪ビルディング本店[1925]や、同社の東京支店第一号館[1927]、第二号館[1931]につながっていくこととなった。“大ビル”と呼ばれた中之島の大阪ビルディング本店は、急成長を続け上位にあつた日本郵船に比肩し得る勢いを持つに至った、大阪商船にふさわしい規模と内容を持つ出来栄であつた。低層部分にはルネッサンス風のおよそ可能な数々のモチーフを使って、装飾美の粋を凝らした意匠となつた。また東京支店第一号館では、フレンチのパラッツォ・ヴェッキオのモチーフを上階に用い、第二号館ではゴシックの垂直性を強調した表現、これは日本興業銀行神戸支店[1928]の見事なポインテッド・アーチを用いたゴシック・イメージのオフィスビルと同時期の作品となつた。この大阪商船系のオフィスビルの表現に共通しているのは、茶褐色のスクラッチ・タイルの多用であつた。それは、渡辺節カラーとでも称すべきであろうか。そこに、彼の作品のユニークさが見られる。

ただ彼の作風にはもう一つの系譜があつた。それは彼の代表作でもあつた、政府機関との関係の深い日本興業銀行本店[1923]や日本勧業銀行本店[1929]の建築に見られるもので、それは古典様式を忠実に踏襲し、巧みにアレンジして、見応えのある作品を生み出したものである。

かつて分離派建築会の暁将として知られた滝沢真弓は、次のように記している。「関東大震災の後、東京の復興もほぼ目鼻がついたという頃、復興建築の見学会が建築学会大会の行事として催された。その時初めて私は『東京勧業銀行本店』を見た。正面中央部にイオニア式オーダーが配されていた。それを見て私は『まるでクラシックの押絵だね』などと、若僧のくせに生意気なことをぬかしたが、一歩内に入ってバンキング・ホールに立った時は目を見張った。端正なクラシックの美しさというものを改めて教えられたからである。ただ滝沢はこのように評した上で、さらにこのクラシック・スタイルには、“日本的クラシズムではないか”との意見を加えている^[1]。

滝沢は日本のモダニズムの先兵としての意気込みを持っていた時代であつたが、様式建築の美しさを肯定せざるを得なかつた所感がうかがえると同時に、渡辺の様式建築が、並々ならぬものであつたことを汲み取ることができよう。

ただ忘れてならないのは、彼を支えた事務所のスタッフたちの存在であつた。その中で傑出した人物として村野藤吾がいた。渡辺が新しく所員を求めて早稲田大学を訪ねた時、白羽の矢を立てたのが村野であつた。村野はその時すでに大林組に内定していた中での出来事であつたという。村野は大正7年[1918]入所するが、その翌年、「様式の上にあれ」との論考を発表し、様式建築を厳しく批判し「様式に関する一切の因襲から超然たれ!」と述べた。これは同8年[1919]『建築と社会』5月号に掲載されたもので、同9年の分離派宣言より少なくとも半年以上早く

出されたものであつた。村野の主張は渡辺の考えと相いれないものであつたが、仕事の上では見事に様式を取り入れた秀作が生まれた。村野は終生、自らが今日あるのは渡辺先生のおかげだつたと謙虚に語っておられたのが思い出される。

4—綿業会館の誕生

渡辺節の代表的作品の中で、綿業会館[1931]はさらにその魅力を高める上で役立っている。昭和初期は大阪の綿業界にとって盛況の時代であつた。紡織品(生糸、棉花、羊毛など)の輸出高は、日本の貿易額の60%を超える勢いであつた。元来関西は日本紡績業発生の地で、特に大阪は“東洋のマンチェスター”と呼ばれるほどであつた。したがって大阪に綿業界の交流に役立つ施設がなく、東洋紡専務だつた故・岡常夫の遺志で百万円の寄付があり、これを基金として有力者の協力があり、倶楽部設立に至っている。この建物の外観は一見オフィスビルを思わせる構成だが、細部を見ていくと、精緻に計画された外壁の組み立てが見られる。全体は三層構成で、基層は石積みをイメージしたルスタカ風の目地切りとし、渡辺が言うコロニアル風としてベランダの手摺りをイメージした徳利束を並べた。窓などの開口部はアーチ(迫り持ち)とリントル(襷式)を組み合わせ、薄茶褐色のタイルで全壁面を覆い、正面玄関周りはブロンズ製の菱形格子を持った重厚な鉄扉が付く。内部については、各所に見事な味わいのある空間が演出された。1階の玄関ホールは、周囲をイタリア産トラバーチンで壁面構成がなされ、要所にトスカナ風のピラスター(半柱)が付いて分節される。このホールは2階まで吹抜けであるが、渡辺によるとトラバーチンは値段が高いため、上部の目が届かない壁面は擬似ボードでカムフラージュしたという。

さらに重要な空間が演出されたのが2階の談話室であつた。高い天井、広い空間を持つこの部屋は、正面暖炉周りの左側壁面に天井にまで届く色鮮やかな窯変タイルを用いたタペストリーや、暖炉上飾りに取り付いた長方形の箱形の飾りによって、分節的なイギリス17世紀初期のジャコピアン風の雰囲気を示している。この建物について渡辺は「綿業会館の設計と私」^[2]という一文を寄せており、紡績人は多くイギリスを訪れているので、イギリス風とし、クイーン・アン、アダム・スタイル、アンピールなど部屋ごとに異なったデザインを行つたと述べている。この建物には事務所のチーフ・デザイナーであつた村野藤吾も独立するまで、少なからずかかわつていた。

また渡辺がこの会館の設計を受けることになった背景として、彼の住んでいた地域での交友関係のあつたことがうかがえる。それは親子2代にわたって日本綿業倶楽部の会長となつた阿部孝次郎が「渡辺さんの思い出」^[3]の中で次のように記している。「渡辺さんは阪神住吉に住んでおられたが、私も永年住吉に住んでいたため、毎日阪急電車で大阪に通うみちでよく同車するのであつた。あのキッチンとした端正な姿で、晩年はステッキをついておられたようだつた。大学教授風でいわゆる英国紳士型であつた」。

実際、住吉、御影には多くの財界人、実業家が住んでいて、乾新治についても、後継ぎの乾豊彦はゴルフを通して、渡辺との親交があり、そのことが広野ゴルフクラブ[1932]や乾(新治)邸[1937]の新築に結び付いたと回想している^[4]。

渡辺は、大正の始めから住吉に住むが、その自邸は木造2階建ての古びた和風住宅であつた。終戦後、渡辺は昭和21年[1946]大阪で事務所を開いて復帰した。翌年、渡辺道輝が入所して再出発するが、彼自身は同27年[1952]大阪府建築士会会長となり、建築士会の発展に尽力した。晩年の渡辺は、住吉の自邸で秋になると菊花展を開いて多くの知人を招待していた。筆者も晩秋の一日、住吉の本邸を訪ねたことがあつた。文字どおり伝統様式の大道を歩んだ建築家であつたが、その自邸は誠に質実な和風の伝統様式のお屋敷であつた。

さかもと・かつひこ——建築史家・神戸芸術工科大学名誉教授/1926年生まれ。専攻は近代建築史、デザイン史。
主な著書「明治の異人館」[朝日新聞社/1965]、「日本の建築 明治大正昭和5 商都のデザイン」[三省堂/1980]、
「阪神間モダニズム」[共著、淡交社/1997]、「近代日本の郊外住宅地」[共著、鹿島出版会/2000]など。

日本勧業銀行本店 | 上—外観★/下—営業室★
銀行建築は様式建築を表現する上で最も適当な建築といわれていた時代、渡辺節はその優れた感性によって、この建物を自他共に認める代表作に仕上げた

渡辺節と村野藤吾 | 村野藤吾は自らの主義主張とは異なりながら、師として渡辺節を尊敬し、生涯自らの恩師としての立場を崩すことはなかつた[出典:『近畿建築士のひろば』1966.5]



菊花展 | 晩年の渡辺節にとっての楽しみは、自邸での菊づくりであつた。ただ彼の取り組みは生半可なものではなく、土づくりから苗木づくり、開花まで人任せでなく、自らが丹念に手をかけたものであつた[出典:『建築家 渡辺節』]

[1] 滝沢真弓「菊と刀・そしてラヴァティン」『建築家 渡辺節』
[2] 渡辺節「綿業会館の設計と私」『日本綿業倶楽部・月報』1969.5
[3] 阿部孝次郎「渡辺さんの思い出」『建築家 渡辺節』
[4] 乾豊彦「建築家 渡辺節」

旧大阪商船神戸支店

(現・神戸商船三井ビル)

竣工年:1922年

所在地:兵庫県神戸市中央区海岸通5

規模:地下1階、地上7階、塔屋1階 | 構造:SRC造



2



3



4

1—南面全景:神戸の海岸通り、海に面して建つ重厚で迫力のある外観である。旧居留地において、港町神戸のシンボリック的存在となっている。ルネッサンス風オフィスビルの特徴をよく示している。特に1階ベース部分のルスタカ(切石積み)風は荒々しく圧巻である。全体として三層構成で、中間部の外壁の柱型はフラットなテラコッタ張りで頂部に楣飾りが付き、その上にコーニス(軒蛇腹)があって最上階が形成され、南面の隅角部分は円弧状の破風となり、その中央にスクロール(渦巻き)を持ったメダリオン(飾り額)が付く

2—西玄関出入口上部の欄間:中央円内に帆船をレリーフとし、周囲に青海波をイメージした装飾が付く

3—オフィス階廊下

4—階段の親柱



綿業会館

竣工年:1931年

所在地:大阪府大阪市中央区備後町2-5-8

規模:地下1階、地上6階(1962年の新館建築により、現在は7階と表記)、塔屋1階 | 構造:SRC造
重要文化財



2



3



4



5



6

1—談話室:会館の最も重要な室内空間として設計された。高い天井、広い空間は、重厚な落ち着いた雰囲気を出している。圧巻はやはり正面暖炉左側壁面を覆う窯変タイルによるタペストリー風の壁面装飾である。タペストリーは、本来、壁掛けなどに用いる絵模様などのつづれ織りを指すが、これをタイルで表現したもので、渡辺節によると、タイルは京都の泰山が焼いたものを、自らが全体のコンビネーションを考えて一枚一枚、丁寧に張り上げたという

2—会員食堂:この部屋も豊かな装飾が随所に見られる。天井梁型の古典モチーフの装飾、写真では見えないがアーチ状の開口部の欄間ガラスに透かし彫りの美しい飾りなどがそれぞれである

3—玄関ホール:イタリア産トラバーチンによる整然とした左右対称の構成で、2階天井までの吹抜け空間を有している

4—貴賓室:戦前は皇室専用に使われていたといわれる。天井に石膏または漆喰と思われる花鳥の立体装飾を用い、壁面を木質板で覆った上質な室内空間で、椅子、テーブルにクイーン・アン風の特徴が見受けられる

5—鏡の間:会館の主要会議室でアンピール・スタイルを取り入れたといわれる。アンピール・スタイルは、フランス19世紀初期、ナポレオン1世の時に流行した様式で、古典を基調としながらも、直線や円を活かした品のあるシンプルなデザインが多い

6—正面外観



乾邸

竣工年:1937年

所在地:兵庫県神戸市

規模:地下1階、地上2階、一部3階 | 構造:RC造、一部木造
神戸市指定有形文化財



2



3



4



5

1—玄関ホール:正面を見て2階へ上る階段を右に、応接間に通ずる左側廊下には、トスカナ風の太い円柱が配されている。2階へ上る階段は親柱も大きく、階段の手摺りには唐草模様の透かしのある木彫り腰板として使われていて、豪華な雰囲気を感じることができる

2—南面外観:外壁は黄竜山の自然石を用いた石造り風であるが、実際の躯体はRC造である。建物の中央の張り出し部分は、1階が居間、2階に主人の寝室が設けられ、ベイ・ウィンドー風の扱いとなっている

3—車寄せ:乾邸を訪れて最初に抱く印象は、敷地の

東南にある正門を入って主屋を左に見て玄関へと向かうアプローチで、前方に見えるポーチ(柱の回廊)の存在である。ポーチは普通、建物の正面にあって、中央玄関に相当する役割を果たすものであるが、この建物のまさに巧みな配置をとっている。ポーチの柱は太く、トスカナ風で黄竜山石を用いた重厚なもの。天井はトンネルヴォールト(長い丸天井)

4—玄関:北に向かって開かれた玄関には、ダイヤモンド型(菱形)格子にデザインされた鉄扉が付き、床は大理石

石トラバーチン。壁面はタイル張りで、正面の壁には陶板飾りが嵌め込まれている

5—応接間:高い天井、南側の大きな窓から差し込む室内は明るさに満ち、東側の中央にある大型暖炉や、正確に分節されたジャコビアン風の本製壁面と、リネンウォールド(折布飾り)、天井に見られるアダム・スタイルの装飾など、イギリスの古典様式のモチーフが各所に用いられ、壮麗な室内空間が表現された。特にこの応接室から最上階のサンルームにつながるロート・アイアン(錬鉄)の繊細な室内階段が目立つ

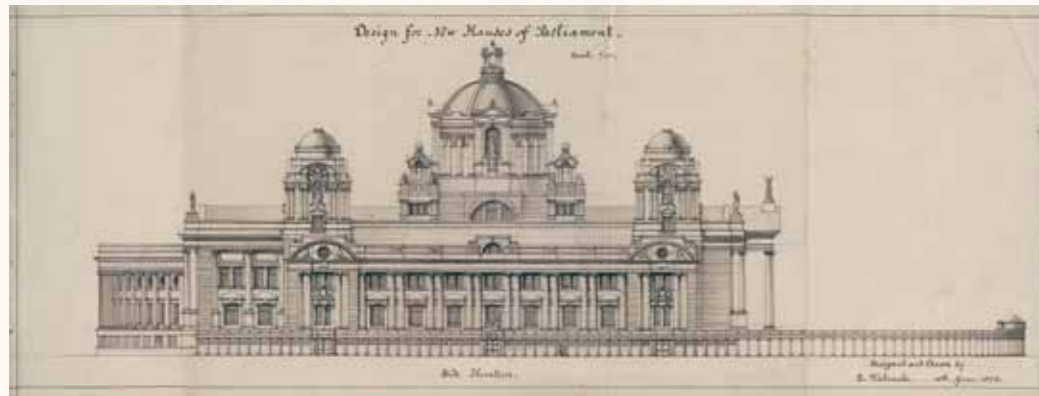
卒業設計

卒業設計「Design for New Houses of Parliament」[1908]:卒業制作に国会議事堂を選ぶことは、それなりに相当な覚悟が必要であったであろう。それはスケールや内容の複雑さ、国家の品格を表すものであったからである。中央の高塔と両翼のバリエーションによって左右対称の均整のとれた立面が構成され、平面の詳細は不詳であるが、両翼に上、下2院の議場が配され、達者な筆致と共に充実した内容と表現を読み取ることができる

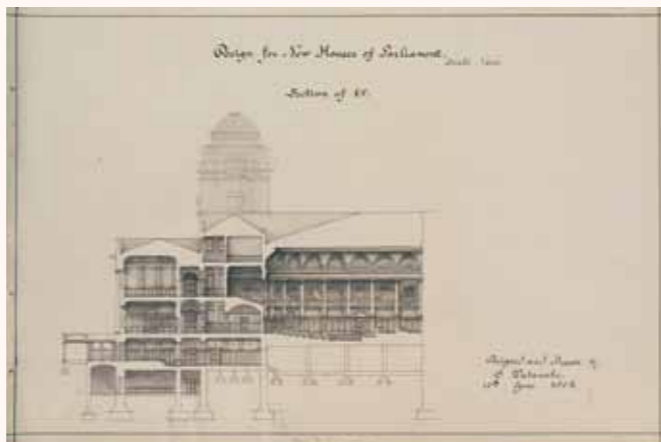
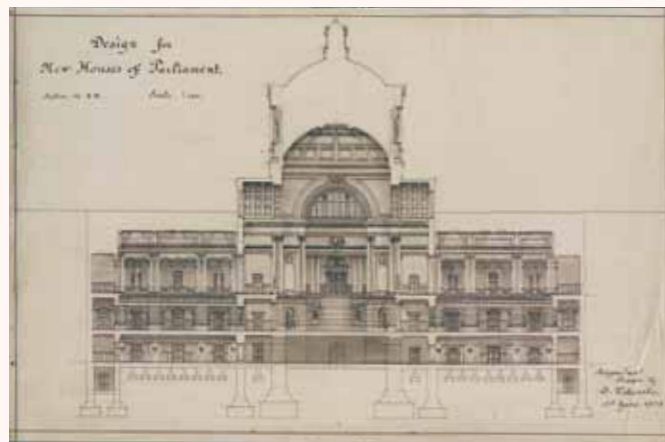
1—正面立面図 | 2—側面立面図 | 3—AB断面図 | 4—EF断面図 | 5—グランドフロア平面図 | 6—1階平面図[所蔵:東京大学大学院工学系研究科建築学専攻]



1

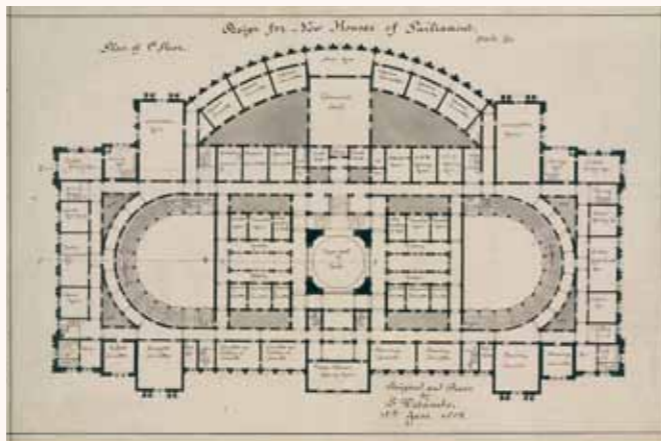
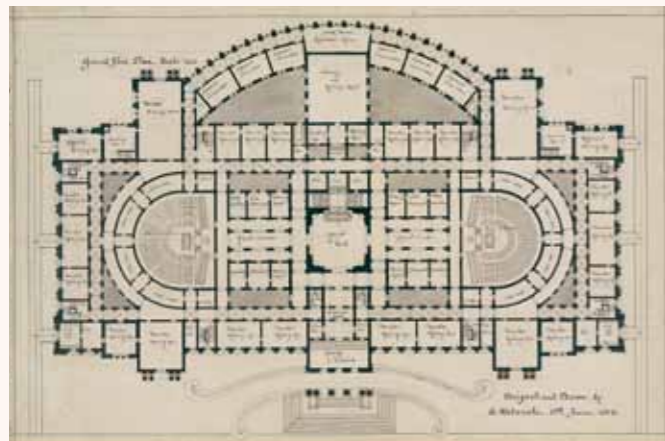


2



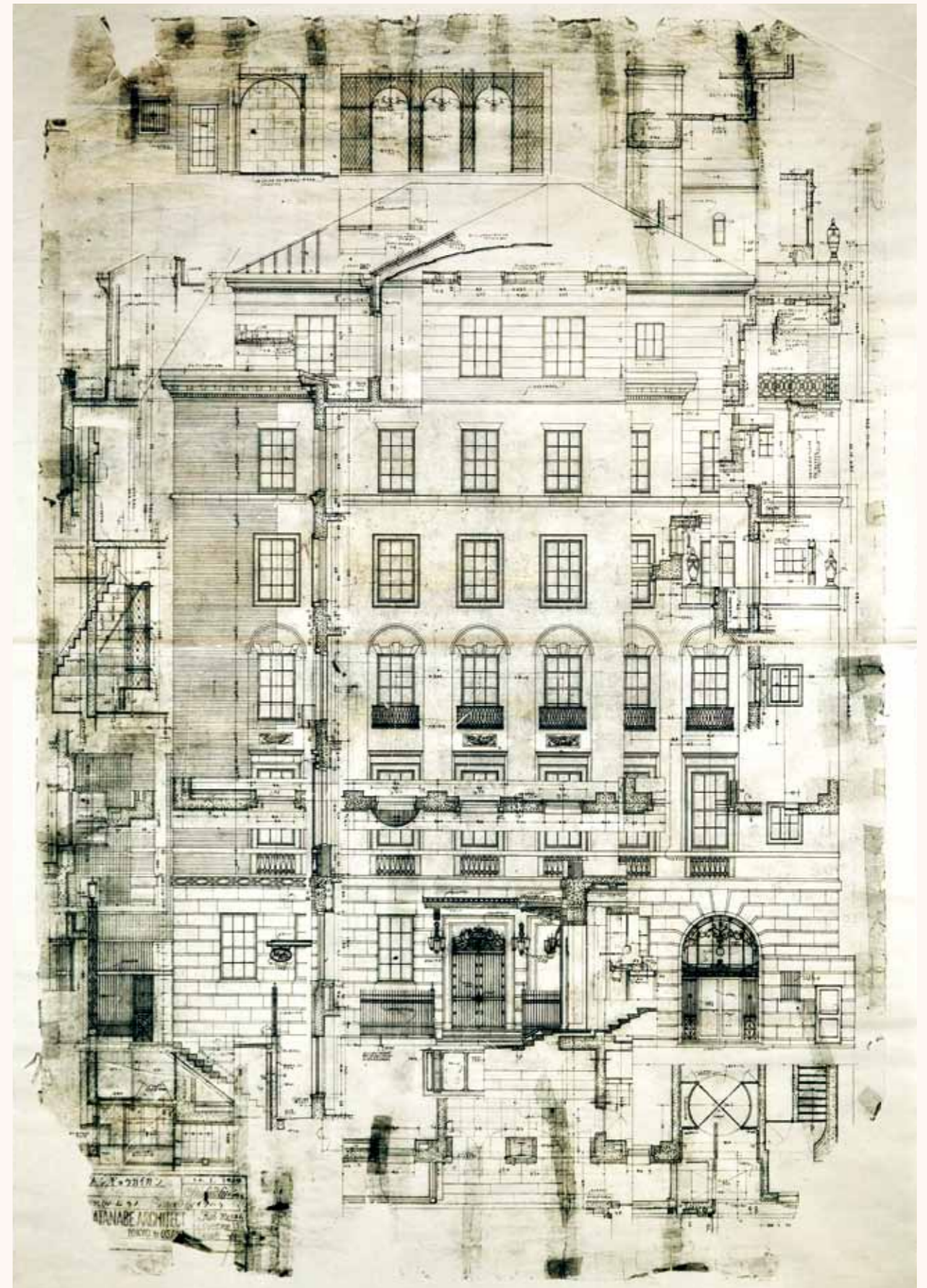
3

4



5

6



7

建築の図面が芸術的価値を持つことについて、現代のCADで描く図面では味わえない魅力があることが分かる。この矩計図によって外壁の綿密な構成やディテールの表現の巧みさがうかがえる。図面左下のサインによって、村野藤吾が関係していたことが分かる。村野はチーフとして渡辺節のコンセプトやデザインモチーフを効果的に表現する上で少なからず貢献したであろうことが読み取れよう。現在は失われているが、3階窓には半円形の窓手摺りが付いていたことが記されている。また、実際に図面を描いたのはイシハラで、これは所員の石原季夫である。石原は村野の片腕として活躍した有能なスタッフで、後に村野の独立に際して行動を共にした人物であった

7—綿業会館外壁矩計図[1929][個人蔵]

明治17年[1884] 東京平河町に生まれる
 明治41年[1908] 東京帝国大学工科大学建築学科卒業。
 韓国政府度支部建築所技師
 明治45年[1912] 韓国政府度支部建築所辞職。鉄道院西部
 鉄道管理局
 大正5年[1916] 鉄道院西部鉄道管理局辞職。渡辺建築
 事務所開設
 大正9年[1920] 欧米建築事情視察に出る

大正10年[1921] 欧米建築事情視察より帰国
 大正11年[1922] 渡米。建築事情視察
 昭和7年[1932] 『渡邊節作品集』[波紋社]発行
 昭和18年[1943] 福井県芦原町に疎開
 昭和21年[1946] 大阪淀屋橋に渡辺建築事務所復帰
 昭和27年[1952] 大阪府建築士会会長就任
 昭和29年[1954] 日本建築設計監理協会(後の日本建築家協
 会)関西支部幹事

昭和34年[1959] 日本建築家協会関西支部幹事退任
 昭和39年[1964] 財団法人日本建築総合試験所理事就任。
 日本建築センター評議員就任
 昭和41年[1966] 大阪府建築士会会長退任。『近畿建築士
 のひろば』渡辺節特集号発行
 昭和42年[1967] 逝去(82歳)

主な作品 | Works | *印は所在地不明(資料による確認不可)

大正2年[1913] 京都駅舎新築工事担当(京都)
 大正7年[1918] 第六十五銀行大阪支店(大阪) | 大森邸*
 | 大森用紙店* | 日本棉花KK船場支店
 (大阪)・築港倉庫(大阪) | 横浜船渠KK工
 場*
 大正8年[1919] 井上鏡之助邸* | 伏木製紙KK工場* |
 北海道銀行旭川支店(北海道)・滝川支店
 * | 日本棉花KK神戸支店(兵庫) | 北陸
 電化KK* | 三井物産宇野造船所玉島
 工場(岡山)・変電所及造機事務所* | 興
 水化学研究所* | 妙寺製絲KK*・宇智
 工場* | 太平洋運KK寄宿舎(兵庫) | 島
 津製作所* | 第六十五銀行難波支店(大
 阪)・下福島支店* | 山田文太郎氏邸(東
 京) | KK吉備造船所(岡山) | 大紙倶楽
 部(大阪) | 東和汽船KK(兵庫) | 朝鮮製
 油KK* | 東洋リノリュームKK*
 大正9年[1920] 摂陽銀行本店* | 神戸海洋気象台(兵庫)
 | 茂木合名会社大阪支店(大阪) | 合名
 会社勝野商店* | 山口銀行野田支店(大
 阪) | 朝鮮棉花KK*
 大正10年[1921] 梅田製鋼所* | 日本信託銀行(大阪) | 朝
 鮮紡織KK*
 大正11年[1922] 日本興業銀行日本橋支店* | 大阪商船
 KK神戸支店(兵庫) | 山口銀行大正橋支
 店* | 鴻池銀行阿倍野支店(大阪)
 大正12年[1923] 日本興業銀行本店(東京) | 鴻池銀行広
 島支店(広島) | 三井合名会社仮建築*
 大正13年[1924] 青木邸内土蔵* | 日本勧業銀行高松支
 店(香川)・福岡支店(福岡) | 大日本紡績
 KK橋場工場改修* | 日本電力KK尼崎
 発電所(兵庫)
 大正14年[1925] 日本勧業銀行和歌山支店金庫(和歌山)・
 秋田支店(秋田)・福井支店金庫(福井)・青
 森支店金庫(青森)・山形支店金庫及付
 属家(山形)・金沢支店金庫* | 川西倉庫
 KK(兵庫) | 小原邸(東京) | 大阪ビルデ
 ング本店(大阪)
 大正15年[1926] 市川邸(兵庫) | 宇治川電気大峰発電所
 (京都) | 新大阪天神橋筋停車場(大阪) |
 大成化学工業KK工場倉庫* | 鹿島清
 平氏倉庫* | 日本勧業銀行仮本店(東
 京)・綾部出張所(京都)・大阪支店(大阪) |
 鴻池銀行上本町支店(大阪)
 昭和2年[1927] 大阪ビルディング東京支店第一号館(東京)
 | 日仏銀行東京支店(東京) | 日本勧業
 銀行鳥取支店金庫(鳥取)・山口支店金庫

(山口) | 横浜正金銀行大阪支店(大阪)
 昭和3年[1928] 日本棉花KK横浜支店(神奈川) | 日本勧
 業銀行京都支店(京都)・久留米出張所(福
 岡) | 東京市電気局芝浦発電所(東京) |
 日本興業銀行神戸支店(兵庫)
 昭和4年[1929] 大日本自転車会社工場* | 加州銀行香林
 坊支店(石川) | 三井物産宇野造船所デ
 ーゼル機関工場(岡山) | 鴻池銀行本郷支
 店(東京) | 鴻池ビルディング東京分館(東
 京) | 東京米穀商品取引所第二部(東京)・
 第一部(東京) | 日本勧業銀行本店(東京)
 | 東海堂書店(東京)
 昭和5年[1930] 平井邸(兵庫) | 第六十三銀行松本支店
 (長野)・高田支店(新潟) | 奥村邸(兵庫) |
 阪神競馬場増築*
 昭和6年[1931] 日本水電KK(鹿児島) | 大阪ビルディング
 東京支店第二号館(東京) | 小倉競馬俱
 楽部(福岡) | 兵庫農工銀行加古川支
 店(兵庫) | 綿業会館(大阪) | 斎藤邸(東
 京)
 昭和7年[1932] 寺田邸(兵庫) | 広野ゴルフクラブ(兵庫)
 昭和8年[1933] 寺田甚吉邸洋館(兵庫) | 自泉会館(大阪)
 昭和9年[1934] 神戸取引所(兵庫)
 昭和10年[1935] 岸和田紡績大垣工場(岐阜) | 大阪商船
 KK天保山乗場(大阪)
 昭和11年[1936] 寺田合名ビルディング(大阪) | 福井人絹
 会館(福井) | 和歌山市役所(和歌山)
 昭和12年[1937] 神戸ガスビル(兵庫) | 乾邸(兵庫) | 大阪
 ビルディング新館(大阪) | 染工聯ビル(大
 阪) | 丸物百貨店(京都)
 昭和13年[1938] 日商KK本社(大阪) | 芝原邸(京都) | 南
 海高島屋地下食堂(大阪)
 昭和14年[1939] 東京糖業会館(東京) | 南海電鉄難波駅
 プラットホーム(大阪)
 昭和15年[1940] 川崎車輛鑄鋼工場(兵庫)
 昭和16年[1941] 大阪機工猪名川工場(兵庫) | 川崎航空
 機明石工場(兵庫)
 昭和17年[1942] 大阪絹人絹会館(大阪)
 昭和18年[1943] 川崎航空機都城工場(宮崎)
 昭和19年[1944] 川崎航空機明石病院(兵庫)
 昭和21年[1946] 福井軍政部事務所(福井) | 福井人絹倉
 庫(福井)
 昭和23年[1948] 神戸貿易会館* | 大阪機工本社事務所
 *
 昭和24年[1949] 福井銀行本店改修*
 昭和25年[1950] 日本貿易産業博覧会2号館(資源館)神戸
 * | 兵庫県織維会館* | 福井絹業会館*

| 福井銀行佐佳枝支店*
 昭和26年[1951] 肥後銀行本店(熊本) | 呉羽紡績名古屋
 支店(愛知) | 大阪機工吉見工場宿舍(大
 阪)
 昭和27年[1952] 鹿児島銀行大阪支店(大阪) | 旭化成芦
 屋寮(兵庫) | 森本倉庫(兵庫)
 昭和29年[1954] 倉敷紡績本社新館(大阪) | 大阪商船横
 浜支店(神奈川) | 堂ビル清交社改装(大
 阪)
 昭和30年[1955] 肥後銀行福岡支店(福岡)
 昭和31年[1956] 日商本社新館(大阪) | 白浜カントリークラ
 プ(和歌山) | 専売公社地方局アパート(福
 岡/熊本/鹿児島) | 旭化成甲子園家族寮
 (兵庫) | 大阪商船相信寮(神奈川) | 寺田
 万寿病院増築(大阪)
 昭和32年[1957] 日商名古屋支店(愛知) | 松下電器産業
 松健寮(大阪)・茨木寮(大阪) | 寺田病院
 看護婦宿舍(大阪) | 本嘉納商店酒蔵庫
 (兵庫)
 昭和33年[1958] 日商本社別館(大阪) | 城陽カントリー倶楽
 部(京都) | 広野ゴルフ倶楽部改築(兵庫)
 昭和34年[1959] 中井商店アパート(東京)
 昭和35年[1960] 日本触媒化学工業研究所(大阪) | 四条吸
 カントリー倶楽部(大阪) | 奈良国際ゴルフ
 倶楽部増改築(奈良) | 和歌山大学松下
 会館(和歌山) | 中之島旅館増築* | 旭化
 成茨木寮(大阪) | 城陽カントリーキャデ
 ィヤ宿舎(京都)
 昭和36年[1961] 神戸銀行松屋町支店(大阪) | 立花商會
 本社(大阪) | 旭化成芦屋寮(兵庫)・高槻
 寮増築(大阪) | ホテルパシフィック(和歌山)
 | 南海合織女子寮(大阪) | 京町堀分譲
 施設付住宅(大阪) | 本嘉納商店製品倉
 庫(兵庫)
 昭和37年[1962] 松下電器産業京滋営業所(京都) | 寺田
 万寿病院本館増築(大阪) | 綿業会館新
 館(大阪) | 大阪機工T型旋盤工場(兵庫)
 昭和38年[1963] 茨木カントリー倶楽部(大阪)
 昭和39年[1964] 守口駅前分譲施設付住宅(大阪) | 多根
 邸(兵庫) | 千里佐竹台小学校(大阪)
 昭和40年[1965] 白雲ビル(大阪) | 菊正宗酒造四季醸造蔵
 (兵庫) | 肥後銀行本店増改築(熊本) | 橋
 本ゴルフ場クラブハウス* | 三田国際ゴ
 ルフ場クラブハウス* | 香里中央市街地
 住宅(大阪)

*このページは、渡辺建築事務所東京事務所のホームページをもとに、『近畿建築士のひろば』1966.5、「履歴書」[渡辺建築事務所/1966]などにより補足し、編集部が制作したものです

取材協力:安達英俊/神戸市市民参画推進局文化交流部/社団法人日本綿業倶楽部/商船三井興産株式会社神戸支店/渡辺建築事務所東京事務所
 参考資料:『渡邊節作品集』[波紋社/1932]/『近畿建築士のひろば』1966.5/『建築家 渡邊節』[社団法人大阪府建築士会/1969]/『日本の建築 明治大正昭和6都市の精華』山口廣著[三省堂/1979]
 その他:★印の写真および図版は、出典『渡邊節作品集』/特記のない写真は振り下ろしです
 次号予告:INAX REPORT No.189の「続・生き続ける建築」は木子七郎です